

旧曙町稚蚕共同飼育所に付いての聞き書き(WEB 版 2025 年)

殖蓮史談会 発表資料

作成 2018 年 3 月 28 日 作者非公開

WEB 版 作成 2025 年 12 月 03 日 作者非公開

1. 初めに

ユネスコの世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、富岡製糸場、荒船風穴、高山社跡、田島弥平旧宅で構成されている。富岡製糸場は、国営ではじまり、その後は民間企業になった。絹産業では、絹製品製造が注目されるが、民間の農業としての繭生産も重要である。その養蚕も、産業構造が変わり大きく衰退している。生物は、幼生の段階が一番弱く、養蚕では稚蚕を育てる工程に細心の注意が必要である。人間の子育てと共通する所があり、主に農家の主婦層が、この稚蚕の飼育を担当していた。稚蚕共同飼育所の導入で、稚蚕の飼育を、最新の技術と最新の設備で行えるようになった。民間の稚蚕共同飼育所が、盛んで、養蚕が元気であった時期があった事は記録に値する。時代の流れは余りにも早く、養蚕地域に多数作られた稚蚕共同飼育所は、閉鎖や撤去され今日に到る。幸い、旧曙町の稚蚕共同飼育所は、野菜加工の工場として現在も稼働している。この記事では、旧曙稚蚕共同飼育所で働いた女性や殖蓮史談会元会員からの聞き書き等を以下に紹介する。

2. 激変した戦後の農業

筆者は、旧伊勢崎市曙町で終戦直後に生まれ育った。敗戦で、家族関係、仕事のやりかた、生活様式から物の考え方まで、あらゆる物事が激変した。また、農家の収入より、サラリーマンの収入が高くなり、勤めに出て、農業を従とする兼業農家が増大した。その当時、主に養蚕に従事したのが、まだ若い 20～30 歳台の農家の嫁さん達であった。話を聞いた女性によると、今年 90 歳との事であり、当時稚蚕共同飼育所で一緒に働いた女性は、既に数人になっているそうである。

3. 日本の繭生産の推移

今回の発表を機会に、国の統計より、養蚕の農家戸数と繭生産量、一戸あたりの繭生産量を調べたら、養蚕農家数はほぼ一貫して減少、繭生産量は戦前の昭和 4 年の 40 万トンが歴代最大生産量で、戦後のも生産のピークがあったが、日本の繭生産は減退期に向かった。だが、戦後は、一戸あたりの生産量は約 3 倍ほどまで成長して、繭の生産性が非常に向上した事が分かった。稚蚕共同飼育所等の生産技術の貢献があったと考えられる。

全国繭生産量(1915～2004)

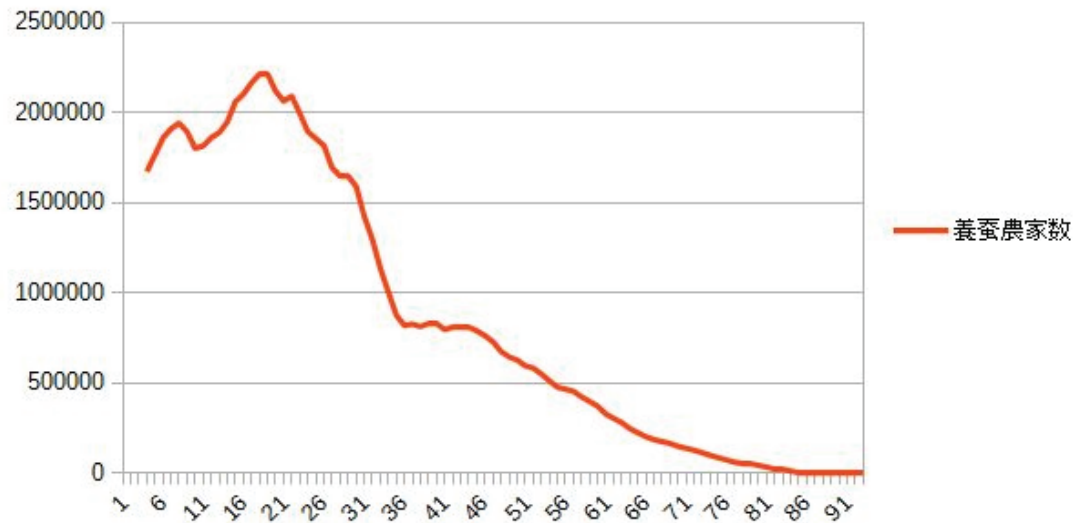


旧曙町稚蚕共同飼育所に付いての聞き書き(WEB 版 2025 年)

4. 養蚕農家の分業体制

農家は典型的な家内産業だが、男衆と女衆に特有の仕事もあった。蚕室を準備し、蚕の卵からケゴをはやす掃き立て等の細かい仕事は女衆の仕事だった。祖母が、蚕室の障子に新聞紙等を貼って密閉しホルマリンで消毒するのを見ていて大変だと思った。男衆は桑を刈ったり、道具を組み立てたりと主に力仕事をした。子供の手伝いには、桑摘み、ズウ拾い等があった。

養蚕農家数の推移(1915～2004)



5. 近代産業のゆりかごだった絹産業

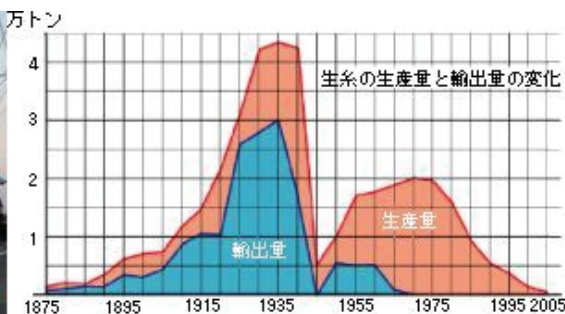
江戸末期から明治時代は、手工業的な絹産業が、蒸気機関（動力革命）を使った機械産業に変貌した。絹の原料である繭・絹糸の需要も増大した。今年（明治維新）以来150年、日本が開国し・産業立国が出来たのも、黒船ショック・動力革命を正しく理解でき、西洋科学を取り入れる事が出来たのも一因です。

養蚕農家も全国に広がり、養蚕業の最盛期1930年代には、農家の40%で養蚕が行われていた。日本の生糸の生産量と輸出量の統計データを見ると、日本は、戦前と戦後の短い期間だけ生糸の輸出国だった事が分かる。現代は、日本の生糸の生産量も微々たるもので、その輸入国になっている。

6. 絹のライバルの化繊が出現(需要減)

昭和萬葉集3巻に次の短歌を見つけて衝撃を受けた。

桑園に資本の威力おもはせてレイヨン大工場またたくまに建つ



「蚕糸業要覧」 昭和10年代

に、絹のライバルの化繊が登場して大量生産されたが、戦時体制下で、化繊（原料が石油：日本は産油国の禁輸で石油の輸入が出来なくなった）の生産も困難な時代になった。生糸の最大用途が婦人用長靴下との事であり、絹のライバルの化繊の出現が、絹生産に与えて打撃

旧曙町稚蚕共同飼育所に付いての聞き書き(WEB 版 2025 年)

は大きかった。

7. 昭和30年～40年頃に二度目の絹産業ピークが到来

経済の高度成長期は：1954年（昭和29年）12月（日本民主党の第1次鳩山一郎内閣）から1973年（昭和48年）11月（自民党の第2次田中角栄内閣）までの約19年間である。この時期に、絹の内需が増大し絹産業の二度目のピークが到来した。だが、日本の絹産業は、輸出国から輸入国に構造変化してしまった。世界の蚕糸業の中心は、中国、インド、ベトナム、ブラジル、ウズベキスタンなど途上国や中進国に移っている。

8. 稚蚕共同飼育所の盛衰

8. 1 稚蚕共同飼育所の発足

稚蚕を共同で飼育する養蚕方式は、小規模ながら戦前から始まったが、盛んになったのは戦後からである。稚蚕とは、稚蚕共同飼育所が対象にしている、1～2齢、または1～3齢を言うようで、稚蚕共同飼育所により若干差があるようだ。従来、群馬県の稚蚕の飼育は、上州の女衆の勤と勤勉さで支えられていた。当地区では、稚蚕を最新技術を使って協同飼育しようという動きが、稚蚕飼育組合という形で始まった。昭和48年頃（養蚕の最盛期）だったようだ。発起人には当時養蚕をしていた農家の三十余名が名を連ねている。尚、蚕種会社との関係で、稚蚕共同飼育所に参加しない養蚕農家もあったと聞いている。

8. 2 桑摘みの方法が変化

今回聞いた話では、従来、養蚕に使う桑は、初回は桑の木から葉を摘んで与えていたというが、稚蚕共同飼育所が出来てからは、葉の付いた桑の枝を切って飼育所へ運んだそうだ。二回目の飼育では、伸びた枝の葉を従来通り摘んだとの事。

8. 3 農協が稚蚕飼育事業に参入

当初、稚蚕共同飼育所は組合の運営であったが、その後養蚕農家の減少に従い、農協の事業として運営されたという話も聞いた。従来、細かく刻んだ桑をケゴに与えていたが、新技術では人工飼料を与えたようだ。人工飼料なら、桑を育て、葉を摘む必要も無く、栄養バランスが良くなり、病気の心配も減少した。稚蚕飼育の効率化・省力化は時代の要求に合っていたのだ。そのような稚蚕を、整った機器や施設で飼育するので、コストはかかるが、大きな効果が得られた。

8. 4 県が稚蚕共同飼育所の設置を推進

稚蚕共同飼育所の建設は、県の指導・推進で、各地区で行われたようだが、現在施設が撤去されたりしてその数は極少なくなっているようである。装備した施設・機材や地域的な見地から再利用可能な稚蚕共同飼育所は、保存・利活用されている場合もあるようだが、その実態は定かでは無い。

9. 稚蚕共同飼育所での仕事

9. 1 仕事の調整

当初、稚蚕共同飼育所は、多数の養蚕農家が参加した共同組合として運営されたが、農家の飼育規模が異なり、仕事量の配分、役割分担などの調整が大変だったらしい。当時の養蚕農家の嫁さんのお舅さん達が、全体的な仕事の調整・管理等を行っていたらしい。

9. 2 技術指導

最初は、農協の稚蚕飼育担当職員が、技術指導をしていたとの事である。今回、元殖蓮史談会員のKSさんの関係者が、初代の技術指導員だったと話を聞いた。指導員はその後、何回かわ変わったらしい。

9. 3 グループ別共同作業

稚蚕共同飼育所の施設等は見えないが、空調設備等は共通の棚飼（たながい）方式だった

旧曙町稚蚕共同飼育所に付いての聞き書き(WEB 版 2025 年)

ようだ。仕事の分担は、三名で一つの棚を担当して、他のグループと仕事の速さ等を競ったとの事である。相手や仲間がいる協同作業で、賑やか・和やかの中にも、緊張あり、時には競争になる場面もあったらしい。地域農家の歴史の中で、戦前は隣組の助け合い的な共同作業があったらしいが、戦後にも別な形の共同作業があった事は記憶に値するだろう。

10. 稚蚕共同飼育所の現在

10. 1 三和町堤区の稚蚕共同飼育所

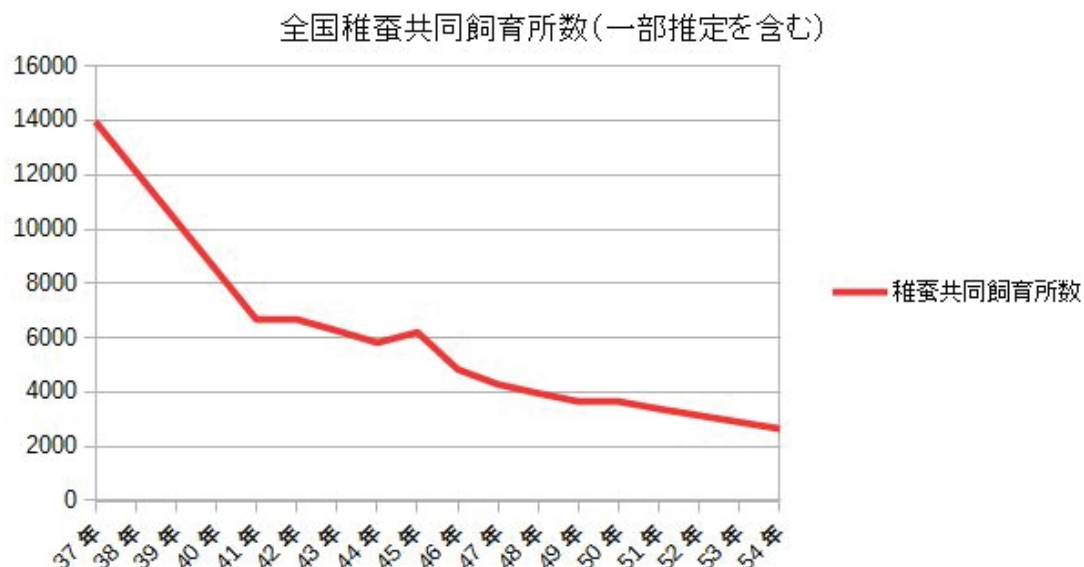
元殖蓮史談会会員故S K氏によると、三和町堤区にも稚蚕共同飼育所があったが、養蚕農家が無くなると程なく、稚蚕共同飼育所は解体処分・用地も売却してしまったとの事である。従って、三和町堤区の稚蚕共同飼育所の姿は、記憶や記録の中に残るのみになった。

10. 2 三和町曙区の稚蚕共同飼育所

当地区の稚蚕共同飼育所は、一時閉鎖期間があったが、その後、野菜加工（カット野菜の生産）業者がその建物・施設を借りて、野菜の加工事業を行っている。お蔭で、その賃貸料で、ささやかながら旅行をしていた。それも、稚蚕共同飼育所で一緒に働いて女衆が元気な時までであった。今では、旅行に代わって食事会を行っている。稚蚕共同飼育所が立ち上がったのが、蚕糸業のピークの頃であり、その後養蚕は急激に衰退してしまい、いまや当地区の養蚕農家は相当前から一軒も無い。設立当時の組合員も全て故人になっている。

10. 3 全国の稚蚕共同飼育所数

2008 年度の政府統計によると、大から小までの規模を総合して、稼働している稚蚕共同飼育所はたったの 29（平成 13 年度は 43 カ所）カ所であった。以下のグラフは農林水産省の統計データ（養蚕に関する参考統計：各年度）を元に作成した。データ不足部分は、前後のデータから中間値を推測した。このデータから、養蚕の最盛期には、稚蚕共同飼育所は 10000 カ所以上あり、その激減ぶりが把握できる。



このグラフは、あくまで参考データです。このデータの扱いに関して、本記事の末尾を参照して下さい。

11. 終わりに

旧曙町稚蚕共同飼育所に付いての聞き書き(WEB 版 2025 年)

戦前から稚蚕共同飼育所が作られ始め、昭和 30 年代から数が増えていき、昭和 50 年代にはほぼすべての養蚕農家の稚蚕が稚蚕共同飼育所で飼育されるようになったとの事である。25 戸で 1 稚蚕共同飼育所ができたと仮定するとその数は、全国でほぼ 1 万程度と逆算できる。稚蚕共同飼育所は、その規模にバラツキがあるが、平均的には当地の稚蚕共同飼育所程度の規模が参考になると思われる。時と共に、稚蚕共同飼育所の数が減るのは、規模の拡大もあると考えられるが、養蚕業の衰退、農業から、工業・サービス業等第二次・第三次産業への産業構造の変化が支配的だったと思われる。稚蚕共同飼育所は、短い期間に多数作られ、短い期間にほとんどが消滅していった現代の養蚕を伝える歴史的施設である。この資料が、地域の養蚕を牽引した稚蚕共同飼育所があったという歴史を伝える資料として、活用して頂ければ幸いである。

以上

謝辞

1. 稚蚕共同飼育所の設置数統計資料の調査に際しては、群馬県立図書館調査相談室にお世話になりました。下記の「農林水産省図書館」の電子化図書一覧にデータがある事等をご教示頂きました。

2. また、稚蚕共同飼育所の設置数の調査に関しては、「農林水産省図書館」の電子化図書一覧の「養蚕に関する参考統計」データを利用させて頂きました。尚、同サイトの検索結果の URL は以下の通りです。

「<http://www.library.maff.go.jp/archive/Search?m=1&p=1&f=%E9%A4%8A%E8%9A%95%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E5%8F%82%E8%80%83%E7%B5%B1%E8%A8%88&fop=0&top=0&aop=0&lop=0&s=0&lpp=0&cId=0&st=0&ist=False>」

本サイトでの検索の結果、稚蚕共同飼育所の設置数は、ヒットした 19 件のデータに分散しており、その中の総括データから、設置数を抽出しました。作成したグラフは、大体の傾向を理解するのが目的であり、データが無い年の分は、前後のデータから推測した値を使用しています。10. 3 全国の稚蚕共同飼育所数における、データはあくまで参考データであり、本記事の作者は、第三者がこのデータを使用するに関して如何なる保証や権利を与える物ではありません。

「農林水産省図書館」の「リンクについて・著作権」に関しては、以下の URL を参考にして下さい。<http://www.maff.go.jp/j/use/link.html>

3 その他のデータや WEB 情報に関して

大日本蚕糸会ホームページの「蚕糸業要覧」等の資料を参照させて頂きました。

追記(2025/12/03) :

現在ユネスコ絹遺産群に指定されている施設は手厚く保護・活用されているが、それはあくまで、行政上の処置に過ぎない。明治以後の日本の財政を支えてきた部分には蚕の蚕種から繭を出荷するまでの、泥臭い農業部門としての養蚕業も絹産業のインフラとして存在していたのだ。筆者も祖母や両親から養蚕の厳しさを見てきたが、いまやそれを語る人もほとんどいないだろう。本資料で取り上げた稚蚕協同飼育所も、戦後は全国で運営されたようだが、急速に衰退して、ほとんどの施設も解体処分されてしまったようだ。幸い本資料で取り上げた「旧曙町稚蚕飼育所」は幾多の活用を経て、現在は野菜加工所として存在している。現在は加工所の土地・建物は加工業者に売却して、組合員は予め決められた手順によって売却資産を分割して組合も解散した。